

第207回aacaフォーラム 地域の力を集めた市民芸術祭 「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」の取組み

開催日:2024年10月20日
引率者:福島 治さん
視察地:江東区古石場文化センター、
アートパラ深川現地会場

フォーラム委員会

「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」は、東京・深川という舞台でアートを街に解放する「地域の力を集めた市民芸術祭」です。今回は、このイベントの提唱者である一般社団法人アートパラ深川理事で東京工芸大学デザイン学科名誉教授の福島治さんに「アートパラ深川」の活動をご紹介いただき、レクチャー後は、門前仲町を散策しながら今年度の芸術祭の様子を体感する一日となりました。



深川の街なかに溢れる「街なかアート」たち

「アートパラ深川」は、何らかの障がいを持つ方々から生み出されたアートが江東区の門前仲町、清澄白河、森下、豊洲に溢れる、深川の街なか全体が美術館になるイベントです。神社仏閣巡りとアート鑑賞が合体した御利益のある街歩きなどにより、偶然の出会いをつくり出します。アートは私たちの心を掴み、人々に「対話」を生みだします。誰もが互いを認め合い支え合う「共に生きる」社会を「アートパラ深川」は目指しているのです。

オリンピック憲章では、スポーツだけでなく、その開催都市の文化・芸術も活性化させレガシーとして残すことが定められています。以前はオリンピックとパラリンピックは別々の主催団体が同じ場所で開催するという形態でしたが、2021年に開催された東京2020は初めてオリパラをひとつの大会として開催。それ故に、障がい者のスポーツだけでなく、障がい者の文化・芸術も活性化させレガシーをつくるのが求められました。オリパラ準

備委員会で活動していた福島さんは、ここでの準備に限界を感じ、市民芸術祭を興すことに切り替えて「障がい者の文化・芸術の活性化とレガシー化」企画を形にし始めたそうです。著名な芸術祭は数億円程度の税金が投入されて開催されているそうですが、市民芸術祭「アートパラ深川」は公的資金に頼らずに毎年資金ゼロから立ち上げ、実施しています。

「『美術』という言葉が誤解を与えている」と福島さん。「『美しい』ことのみがアートではない。『常識からはみ出す』ことが『今までの自分の想像を超える感動』を生み出す。『はみ出す』ことを一緒に楽しみ寄り添い個性を理解することが『共に生きる』には大切」と語られました。

知的障害のある方は特別支援学校を卒業すると、多くの人は就労支援b型の事業所で働くことになるのが一般的。そこでは1カ月の平均給与は1万6千円で、障害の程度に合わせた障害年金を合わせても1カ月10万円には届かないそうです。そのような方が今日本には約30万人程度いらっしゃり、事実上、自立することが出来ない就労環境であることが福島さんの問題意識です。日本国憲法第25条第1項「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」が今の日本では実現されていない現実を福島さんが丁寧に紐解きます。

施設内の会場展示の場では、鑑賞者は良いと思う作品に「いいね」シールを貼り、退場時に自分が評価したアートのポストカードが貰え、3会場全て回ると11枚のアートポストカードが無料で手に入ります。これは、帰宅後に家族に「こんな素晴らしい作品があった」と話題にすることで障がい者へのイメージがポジティブになることを狙ったものとのこと。コンペ受賞者のアーティストは、翌年にミニ個展開催があり、障がい者と社会の接点

が拡大していきます。ミニ個展では希望者にアートの販売も行い、売上は全てアーティストの収入となります。芸術祭の期間中には、障がい者と健常者が一緒になって楽しむイベントも行い、「共に生きる」ための共感の場が生まれます。「絵を1枚売ったら終わり」にならないように2次利用の仕組みも構築。対話型アート鑑賞会など、様々な可能性を模索し、働き方のひとつがアートである、という環境をつくるべく試行錯誤を続けています。

「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」は、社会に新しい価値をもたらす取り組みであり、社会全体が障がい者を含む全ての人々にとって生きやすい場となる未来への道標です。その活動が、他の地域や分野にも影響を与え、日本全体で「誰もが共に生きる社会」の実現に寄与することを願っています。

※「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」憲章

<https://artpara-fukagawa.tokyo/charter/>
(委員長 萩尾昌則)



富岡八幡宮の「みんなのアート絵馬神興」視察



障がい者作家による富岡八幡宮の巨大絵馬と共に